東アジアにおける外交と文化

獨協大学
フォルカー・シュタンツェル

米政治学者ジョセフ・ナイが「ハード・パワー（軍事力・経済力）」と並べて提唱した「ソフト・パワー」は歴史上一貫して見られた。しかしこれはパックスアメリカーナがまだ通用していた頃の概念でもある。冷戦終結をもって、世界は多様化した。様々な主体間の多様な関係が相互依存を生み出し、今日の国際システムは国家のみならず非政府機関やアクターが携わる極めてダイナミックな営みになっている。こうした現状は文化と外交にも表れており、例えばSNSを使って文化の様々な側面が多層的に発信されている。

外交もこうした新しいツールを活用する。二〇一一年の東日本大震災後、ドイツ政府が脱原発を決定した。ドイツ大使館には日本の市民活動家たちからの問い合わせが殺到し、従来の手段では対応しきれなかったために、日本語でのブログ執筆を二年以上続けた。ソーシャル・メディアというひとつのソフト・パワーを用いた外交が、知識、考え方、そして気持ちをも発信するのに役立った。これは政策ではなかったが、日独関係における非政治的なニーズを満たした。

ドイツと日本は八〇年前、国際世界の破壊者であった。しかしここ一〇年、ドイツと日本は世界で最も人気がある。ドイツの場合、市民社会（例：原子力エネルギーからの離脱を達成した社会のエネルギー）や難民流入に対するドイツの人道的行為、サッカーやF1レーサーがソフト・パワーを発揮している。日本の現在の文化はすでにエキゾチックさを超えている。魅力的なソフト・パワーとハード・パワーを行使しない点とが日本人気の要因だ。しかしゲッティンゲンの孔子学院の政治化、学問の自由の弾圧、反日本的な映像を流しているテレビなどは、中国の「ネガティブ・ソフト・パワー」として作用してしまう。

ソフト・パワーを用いた外交が成功する条件は、文化に自由があるということだ。自由こそが文化である。このことを認識している外交のみが、自国の文化の優れた力の恩恵を得ることができる。

Profile
フォルカー・シュタンツェル
Volker STANZEL

●獨協大学客員教授。元駐中・駐日ドイツ大使。博士（ケルン大学）。ドイツ国際安全保障研究所（SWP）シニア・フェロー。ベルリン自由大学大学院東アジア研究科客員研究員。欧州外交評議会（ECFR）会員・上席研究員。ジャーマン・マーシャル・ファンド（GMF）上席研究員。『ドイツ大使も納得した、日本が世界で愛される理由』（幻冬舎）他、東アジアと政治の問題に関する多くの著作がある。